

# 伝えたい

戦後79年 過去から未来へ

伝えたい記憶と言葉

中林孝子さん 90

戦争は、夢も希望も一瞬にして断ち切れ人間の平和に生きるための衣食住のすべてを失ってしまう。戦争は決してしてはいけない。

七十九年前に日本全土は、アメリカの空襲で焼野原となった。私は十歳で国民学校五年生になった。

四月十五日の夜に東京大森蒲田の大空襲でアメリカのB29二百機が落す焼夷弾の猛火の中を逃げた。

私の家族は、父は日本航空からフィリピンマニラ空港に出張して、現地で軍族招集され戦死した。長兄は、海軍将校。長姉は、四日市の燃料省に徴用されて留守であった。母と姉二人弟妹と私の

## 東京大空襲の火海の中を生きて

六人は、毎日の空襲が危なくなり、父母の故郷である諏訪に疎開するため毎日駅に並び一ヶ月以上待ち、やっと切符が取れた。四月十六日に疎開することになった。しかし、十五日夜十一時

頃、空襲警報と共に「ドカン！ビシャン！」焼夷弾が我が家の裏に落ちた。家族で荷物を持ち手を繋ぎ逃げ出した。毎日テレビで見るウクライナの避難民の如く、道路いっぱい大きな荷物を持った人々や、リヤカーに老人や病人を乗せている人が、池上本門寺の森に向かって流れる様に逃げた。

私は、一瞬に我が家の方向に振り返ると真赤な猛火と烈風と猛煙が竜巻の如く舐めて来た。余りの恐怖に私は大勢の逃げる人の波に連れられて走った。家族と迷子になってしまった。「シューン!!ドカン!!」焼夷爆弾は雨霰の如く降っ

て来る。その中をやっと池上本門寺の裏山に逃げ込んだ。本門寺本堂は真赤な火柱で「ドカン!!バタン!!」と焼け落ちて行く。人々は、手を合わせ「南無妙法蓮華経」と唱え続けていた。

朝になり空襲解除となった。大森蒲田市街は一面の焼野原となった。迷子になった私は、トボトボと下って行った時、運よく以前にお隣に住んでいた奥様に逢え助けられて焼野原の中を

来年の戦後80年に向け、引き続き戦争体験談を募集します。内容は戦争体験などに限らず、戦後の生活に関する話題でも結構です。原稿用紙2枚程度(800字)にまとめ、住所、氏名、年齢、連絡先(電話番号と、必要に応じメールアドレス)を添えて寄せてください。掲載時期は改めて調整します。

写真や資料も歓迎しますが、お返しはできませんのでご注意ください。写真や資料の説明文も付けていただけると助かります。差し支えなければ、掲載用の顔写真(イラストでも可)の提供もお願いします。匿名、ペンネームも可能ですが、応募は本名でお願いします。

〒392-8611 諏訪市高島3-1323-1 長野日報社編集局「終戦の日企画」係 hodo@nagano-np.co.jp 問い合わせは本社編集局(電話0266・58・2000)へ。

我が家のあった所まで送っていただいた。

日本は、戦後の食糧難から生きて復興して衣食住も豊になり、戦争もなく平和な幸福な毎日を送っています。私は、卒寿を迎え、一

茅野市ちの

日一生として感謝で生きています。戦争は決していけません。世界中の人々が博愛と平和な毎日が送れますよう祈ります。

※お寄せいただいた原文を尊重して掲載しました。